

活動テーマ

小鹿野町における地域資源を活かした観光ルートの企画

小鹿野町地区 東洋大学

1 活動目的

人口減少下の中山間地域の地域づくりにおいて地域資源の活用と関係人口の増加は喫緊の課題である。その道程には、必定、従来型の単眼的ではなく複眼的、すなわち、学際的な視点が求められることは言うまでもない。対象地とした小鹿野町もまた典型的な中山間地域である。人口・世帯数は共に減少しているものの、ダリアをはじめとする「花」や毘沙門水としても名高い「水」、そして、小鹿野歌舞伎をはじめとする豊かな地域資源に恵まれており、小鹿野高校による尾ノ内百景氷柱の活動支援等の地域づくり活動も活発である。

本活動は、これら一連の活動を支援すべく、初年度にあたる本年度は、まずは観光をテーマとして、小鹿野町において潜在的な地域資源を「地域資源マップ」として可視化した上で、観光振興に向けた論点を明らかにすることを目的とし、長期的には、地域資源を活かした地域経済の活性化と関係人口の増加に資することをねらっている。また、(多少ではあるものの)地域経済活性化・関係人口増加に寄与すべく、年間で延べ50名の教員・学生が現地を訪ねることも目標とした。

2 活動地域の現状

小鹿野町における「地域資源を活用した観光振興による関係人口の増加」を一つの到達目標として据え置いた際、検討すべき重要な課題の一つに、「誰を対象にどのような施策を講じるか？」がある。この問いを念頭に置きつつ、「小鹿野町まち・ひと・しごと創生総合戦略」(小鹿野町(2016))を開くと、2005年以降、同町の生産年齢人口が顕著に減少し(2005年:8,744人、2015年:7,098人)、なかでも20歳代前半を中心とする若者世代(15歳から39歳)の転出が町人口の社会減を引き起こしている主因であることが分かる。

これまで小鹿野町では、地域住民の主体的な協力関係のもと、町内行事の開催や自治会運営などを含む多様な地域資源管理活動が継続されてきた。こうした活動の継続という視点から若者世代の“役割”を捉えると、若者世代とは、今はまだ活動の主力とはならずとも、将来的には活動をけん引していくことが期待される、潜在的かつ重要な担い手として位置づけられる。こうした“地域資源管理活動の将来”を担う若者世代の流出は、現行の地域資源管理活動の衰退を引き起こすだけでなく、持続的な地域社会システムの必要条件である「円滑な世代交代」を危ぶませる重大な課題だと考えられる。

3 活動内容

活動にあたっては、国際地域学科、国際観光学科、都市環境デザイン学科の教員・学生によって東洋大学ふるさと支援隊を編成し、以下の内容を中心に実施した。

1. 夏の研修(2019年8月27日~29日):小鹿野町役場でのレクチャー、キャプション評価法を用いて小鹿野町内の地域資源を抽出・評価し、観光振興に向けた課題と展望を検討。

2. 小鹿野高校イベント参加・研修成果報告（2019年10月19日）：小鹿野高校生徒会の取り組む「家族で竹あかり～星空の下でともそう in 小鹿野～」に参加、小鹿野高校と立教大学からの参加者を得て夏の研修の成果を報告。
3. 冬の研修（2020年2月15日～16日）：「小鹿野高校×東洋大学共同まち歩き」として高校生・大学生のグループで町内の地域資源を探索。

この他にも中山間「ふるさと支援隊」交流会（2019年8月7日、於：埼玉会館）や東洋大学国際地域学科「PS（Project Studies）ワークショップ」（2019年11月28日、於：東洋大学白山キャンパス）、中山間「ふるさと支援隊」活動報告会（2020年2月7日、於：飯能市市民会館）にて本活動を報じると共に、随時、活動内容の具体化や見直しを進めた。



写真 活動の様子（上段左：夏の研修での小鹿野町役場でのレクチャー、上段右：夏の研修での現地調査、中段左：小鹿野高校竹あかりイベント、中段右：冬の研修でのディスカッション、下段：冬の研修の参加メンバー）

4 成果

本年度の成果では、まず、夏の研修をはじめとする現地調査の機会において、「キャプション評価法」を用いて小鹿野町における潜在的な地域資源を抽出し、それを「地域資源マップ」という形で整理した（下図に一例）。こうした調査成果は現地で発表したり（例えば、小鹿野高校竹あかりイベントなど）、小鹿野高校とのまち歩き（冬の研修）の機会を通じて洗練化させることを試みた。小鹿野町の潜在的な地域資源について、例えば、冬の研修においては、まち歩きから得られた当該地域を表すキャッチフレーズとして、「ふるさと」「いつでも帰れる」「レトロと古さ」「静かな中のにぎわい」「探検・経験・気軽に冒険」「磨けば光る」、さらには、「腸が悪くても安心」など様々な視点からのキーワードがあげられたことは小鹿野町の地域資源の高い潜在性を示していると言える。さらに、調査の成果は研修成果報告書として公表したい。

一方、本年度の活動を通じて、県立小鹿野高校や小鹿野町黄金の雫祭実行委員会をはじめとして、次年度以降の活動を展開する上で多くの地元の皆様のご理解を得たことも大きな成果であった。

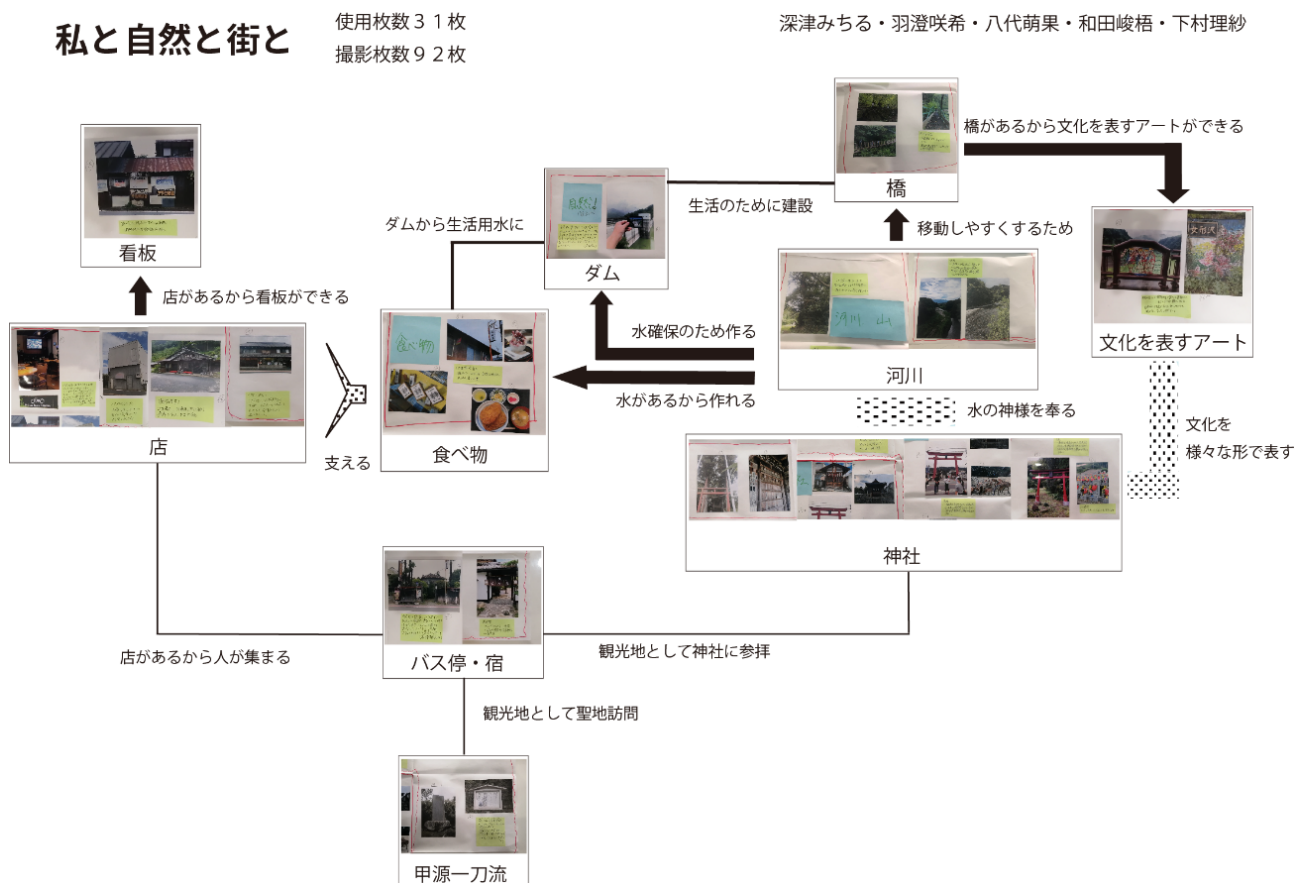


図 地域資源の構造化（例）

5 課題

本支援隊にとって小鹿野町は初めて訪ねる地域であったことから、本年度の活動「小鹿野町を知る」という漠然としたものに留まった点が大きな課題として指摘できるが、上述4の通り、地元の皆様のご理解を頂いたことから、次年度以降の活動において課題を克服することが可能であると思われる。

6 次年度以降の計画

次年度以降の活動においては、本年度の成果に基づき、県立小鹿野高校や小鹿野町黄金の雫祭実行委員会をはじめとする地元の皆様と共同しつつ、より実践的な地域づくり活動へと展開してゆきたい。